イスラーム世界研究　第 15 巻（2022 年 3 月）163–179 頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 15 (March 2022), pp.163–179

スーフィズム理解の模索と展望
――三極構造論と四象限論――

東長　靖*

Paths and Prospects of Understanding Sufism:
Three-Axis Framework and Four-Quadrant Theory

TONAGA Yasushi

I have been interested in the topic of understanding Sufism for almost twenty years. After pointing out the difficulty of the definition of Sufism, I proceeded to construct a new framework to help our understanding of Sufism. Following the "Three-Layer Framework" theory (2002), consisting of mystical, ethical, and popular layers, I advocated a "Three-Axis Framework" for Sufism (2002), composed of mystical, ethical, and popular axes. This paper traces my subsequent attempt to construct a better framework for Sufism. It presents a "New Three-Axis Framework" (2005), which replaced the popular axis with a "popular-guidance" axis. This new axis showed the Sufis' role in guiding common people. After introducing the two "Four-Quadrant Theories" (2017 and 2020), a "Three-Dimensional Framework" (2021), and a "Hexagon Framework" (2021), made up of the "elite," "people," "*ḥaqīqa*-orientation," "*sharī'a*-orientation," "Islamicity," and "universality," I produced a new "Four-Quadrant Theory" (2022) for Sufism. This is composed of two opposites, namely, "mysticism–ethics" and "elite–people." At the end of the paper, I discuss the prospects of a "Sufism-Tariqa-Saint Veneration Complex" theory, utilizing the afore-mentioned "Three-Axis Framework," which this time is applied not to Sufism itself but to this complex in general. I believe this framework shows the subtle relationship of the three elements of the complex, which sometimes overlap with one another and sometimes do not.

1. はじめに

筆者が「スーフィズム＝イスラーム神秘主義」という図式に疑問を感じ出したのは、1986～1988年のカイロ留学時に遡る。それまで、書斎のなかでの形而上学的営為だけを研究対象にしてきた私にとって、エジプトのスーフィズムは、きわめて異質なものに感じられた。哲学的スーフィズム（taṣawwuf falsafī）に触れる機会はほとんどなく、タリーカや聖者信仰を中心とした実践的スーフィズム（taṣawwuf ʻamalī）ばかりが目についたのである。世界の神秘主義思想のなかにスーフィズム＝イスラーム神秘主義を位置づけようと思っていた私は当初この状況に戸惑ったが、2 年間滞在する内に、スーフィズムを、今度はイスラームという枠組みの中でとらえ直したいと思うようになった。それは、きわめて知的な神秘主義哲学が、グラデーションをなしながら、民衆的な営みとも一つながりになっているような何か、であった。

留学から戻った私が最初に取り組んだのは、マムルーク朝において、イブン・アラビーらのイスラーム的「正統」性をめぐってどのような議論が戦わされたかという問題であった。さらにその時代を、イブン・アブドゥルワッハーブまで下らせて、スーフィズム批判を検討した。その過程で、

*　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授

イブン・アラビーらを擁護する学者たちと、非難する学者たちのスーフィズムにまつわる言説の間に大きな乖離があることに気づくことになった。論者によって、何をもって「スーフィズム」として語っているかに大きな隔たりがあり、それは「イスラーム神秘主義」というような簡単な概念では到底語りえないものであることを、痛感することとなった。

こういう経験を経て、2002 年に発表したのが「スーフィズムの三極構造」論である。本稿では、この論の前史からその後の私自身の模索を振り返るとともに、現時点でのスーフィズム理解の見通しを整理してみたい。また最後に、「スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象」論の今後についても付言したい。

2. スーフィズム理解の問題点[1)]

スーフィズムは従来「イスラーム神秘主義」と訳されてきたが、これに対してスーフィズム研究者の多くは懐疑的であるか、少なくとも相当の留保をつけている[2)]。本稿では、神秘主義を「日常生活や理性を超えた絶対者の存在を感得し、それと自己が合一する体験」と定義しておく。これは、「神秘的合一（unio mystica）」が神秘主義の核をなすという宗教学の伝統的な考えに基づくものである[3)]。

スーフィズムを定義することの難しさは、以下の 5 点にまとめることができる。第一に、この語の定義は時によって、規範的理解もしくは記述的理解に支えられているが、それら両者がしばしば混同されて議論されてしまうことが挙げられる。第二に、スーフィズムの外延を示す境界線をどこに引くかが定めにくいことがある。第三に、従来スーフィズムと結びつけて語られることの多いタリーカ・聖者信仰との関係の不明確さを指摘しうる。第四に、スーフィズムとは何かの代わりにスーフィーとは誰かと問いを立て直したとしても、たとえば代表的スーフィーと考えられているイブン・アラビーが自らをスーフィーと呼んでいなかったことに示されるように、一意的に答えを出すことは困難である。第五に、私たちがスーフィズムの担い手であるスーフィーと認識している人々が、歴史資料においてスーフィーと呼ばれているとは限らないという問題がある。

スーフィズムを定義することに代えて、いくつかの要素に基づく構造として示す提案を 2002 年にしたのは、このような困難の認識に基づいたものであった。

3. 三層構造論から三極構造論へ

2002 年には、3 つの論考を相次いで発表した。その内、5 月と 9 月に発表した［東長 2002b; 2002c］では、「スーフィズムの三層構造」という概念を提唱していた。これは、第 1 層を神秘主義レベル、第 2 層を道徳的レベル[4)]、第 3 層を民間信仰レベルとするもので、従来の思想研究の対象であった第 1 層に加えて、ズフドやイブン・タイミーヤ、現代中央アジアのタリーカ復興に代表されるような第 2 層（ここではスーフィズム＝イスラームといえる）、聖者信仰の少なからぬ部分と重なる第

1）　本章は、［東長 2002a; 2013］に依拠して論じる。より詳細には、そちらをご参照いただきたい。

2）　たとえば［Ernst 1997: xvii; Chittick 2000: 1–2］。

3）　ただし、ふつうの日本語としての神秘主義には、もっといかがわしいイメージがつきまとうようにも思う。カルト集団の迷信やまやかしとしか思われないものを表現する時にも、神秘主義的という表現が用いられるのではないだろうか。

4）　このレベルについては、道徳・倫理の両方の語を用いてきている。前者は morality、後者は ethics と訳せるものであるが、より素朴な人間のあるべき道・善悪といったことに関わるものを道徳、より学問的にエリートが説くようなものを倫理、と呼んでいる。ただし、私自身は、民衆とエリートを截然と分けて論じる立場をとらないので、道徳～倫理をグラデーションをなす一つながりのものと考え、両者を呼び分けるということをあえてしていない。

3 層（これは従来、人類学の対象として研究がなされてきた）を考えるものである。この段階では、神秘主義以外の要素を用いてスーフィズムを説明しようとした点が新たな主張であった。

このように図式化したことのメリットは、以下の 4 点に整理できる。第一に、このように図式化することによって、スーフィズムが分析概念であり、自明のものとして用いてはならないことを明示する。第二に、従来スーフィズムと等置されてきた「イスラーム神秘主義」がスーフィズムの一部でしかないことを示す。第三に、研究対象及び研究者がスーフィズムについて語る時、どのレベルをさしてその語を用いているかを、論者各自が自覚的に確認することにより、議論のずれが少なくなることが期待できる。第四点として、スーフィズムの構造に続いて、聖者（信仰）・タリーカの構造を考えることにより、三者間の関係の考察というより大きな目的に資することができよう。

次いで発表した［東長 2002a］では、新たに三極構造という概念を提唱した。三層では第 1 層から第 2 層、第 2 層から第 3 層への変移を示すことはできるが、第 1 層と第 3 層は無関係になってしまうという弊を除くために、三極で示したものである。同時に、三極それぞれに変数をとって、時空間によってスーフィズムが動的にその姿を変えることを示そうとした。ただし、この段階でも依然として、神秘主義を第 1 極、道徳を第 2 極、民間信仰を第 3 極としており、神秘主義を第一としたことは、私自身が「スーフィズム＝イスラーム神秘主義」という定義の呪縛から逃れていなかったことを示している。

その後、「倫理の方がより広範な基礎を提供するものであり、それがある場合には神秘主義へと深まり、ある場合には民間信仰という形で具現すると考えた方が、より実態に即しているのではないか」との指摘を赤堀雅幸氏から受け、第 1 極を道徳、第 2 極を神秘主義と順序を入れ替える草稿を準備したが、最終稿［東長 2005a: 110］では、「三極のうちいずれが基礎となるかということ自体が、時空間により異なると考えるべき」という立場により、X 軸、Y 軸、Z 軸という呼称になり[5]、これは［東長 2013: 34］でも踏襲されている。その段階の三極構造の図は、以下のとおりである。

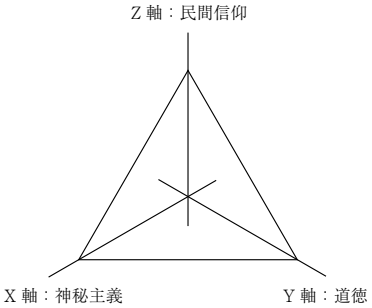
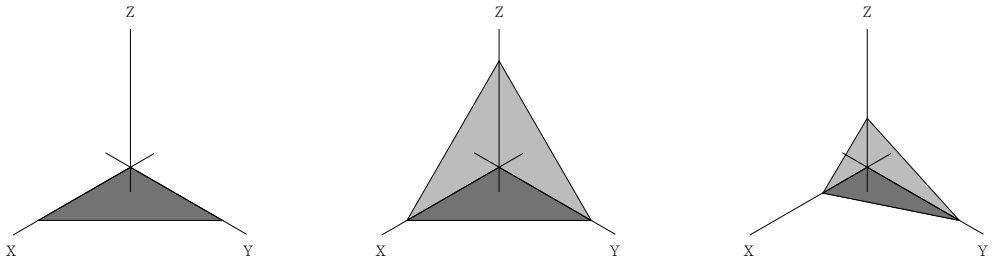


図 1　スーフィズムの三極構造



a. X 軸と Y 軸からなる古典期スーフィズム　　b. 3 つの軸からなる中期スーフィズム　　c. Y 軸を強調する近現代スーフィズム

5）X、Y、Z 軸という呼称は、口頭発表［東長 2005b］で初めて発表された。

4. 三極構造論に対する批判

単行本である［東長 2013］に対しては、複数の書評が寄せられた。［赤堀 2014; 鎌田 2014; 森下 2014; 鶴岡 2014］である。また、書評ではないが、［丸山 2013］も、三極構造論に対する代案を提示している。これらの批判・改良案について、三極構造論だけに限って整理しておきたい。

丸山［2013］は、スーフィズムおよびタリーカを分析する際に、超越性・規範性・共同性という 3 つの鍵概念を導入する。「超越性・規範性・共同性」は、「神秘主義・道徳・民間信仰」への代替案とみることができるが、このうち共同性は、情動性や共在性に支えられた教団員同士の人間関係を各々指し示すとされる。博士論文であることも手伝ってか、三極構造論に対する直接の批判は見られないが、この提唱は、民間信仰概念の曖昧さを指摘し、代案を提示したものと考えてよいであろう[6)]。

赤堀［2014］は、「スーフィズムを神秘主義、道徳、民間信仰の 3 つの軸からなるものとして捉えるこの提案は、神秘主義に偏った形でのスーフィズム理解に反省を迫る点で効果的である」と評価したうえで、「スーフィズムが常にこれらを要素として内包するという誤解を招く可能性はある」と指摘する。ただし、続けて「スーフィズムの歴史を概観する第 3 章に示される実例や、第 2 部と第 3 部の対照関係に目を配り、また、終章末尾の印象的な数頁（pp. 264–266）を読むならば、この議論がむしろスーフィズムの柔軟なありようを示すものであることがはっきりと理解されるだろう」と述べる。

鎌田［2014］は、「現代のスーフィズムまで射程に入れた分析枠組として、これまでスーフィズムという語で捉えられてきたすべての現象を包み込むことができるという意味でこれは優れた枠組である」と評価しつつも、「三極構造論自体はイスラームに内在するものではなく、かえって個々のスーフィズムを論じる際にこの論を持ち出すと、余計な枠組を追加してしまうことになりはしないか、との危惧もおぼえる」という注文を付けている。

森下［2014］は、「本書における解説は、やはり単純化されすぎている嫌いがある。雑多で実体の不明瞭なスーフィズムの全体像を地理的、歴史的にバランスよく描き出すのは、技術的に困難でもあろうが、スーフィズムという複雑な研究の対象に比して、本論があまりに理路整然と一貫し、ディスクリプティブな要素に欠けている点に、筆者はどうしても違和感が否めない」と、図式化に対する拒否感を示している。

鶴岡［2014］は、「スーフィズムは、一部エリートの実践ではなく、広く民衆にも根づいた、イスラーム世界にとって重要な、ほとんど不可欠な部分として捉えられることとなる。本書では前述のように、とくに聖者を巡る崇敬や信仰に着目される。…（中略）…その或る部分だけを分離して取り出すことは、イスラームを外部から「研究」する者の分析的視点なのであって、イスラーム世界に広く浸透した実践態としてのスーフィズムを、またそれを生きている人々を理解するには不十分である。これが、研究者としての著者の実感なのでもあろう。とくに、X 軸中心の研究を遂行する思想研究・文献研究と、Z 軸の側面に集中するフィールドワークに基づく人類学的研究（ないし歴史学的文献研究）とが分離・分裂している実情への不満が、著者の三極構造によるスーフィズム理解を導いたものと思われる。念のため付言すれば、三極構造は三層構造ではない。Y 軸は X 軸の高度な思想や境地に至るための「前提」であり、また Z 軸は X 軸や Y 軸の周縁に「派生」した、不純物との習合態だとするような見方を著者は採らない。一つ一つの極は質的に区別されるが、歴

6）なお、丸山にはより直接的に拙論を批判した［Maruyama 2015］がある。そこでは、近代における民衆的次元の軽視を問題にするとともに、三極構造における「民間信仰」（民衆的次元）に代えて「共同的次元」という概念を提唱している。

史的実相としては、様々なかたちで比重を変えつつスーフィズムという総体を成していると著者は見ようとする」と、三極構造論の本質を汲んだ好意的な評価を下している。

三極構造論に対する批判は、以下の2点にまとめることができる。第一は、三極の一つの「民間信仰」概念の曖昧さである（たとえば、丸山の改良案）。もっともこの民間信仰概念の曖昧さは、三極構造論に先立つ三層構造論の提唱時から、私自身が次のように自ら認めていたものである。

> ここで断っておきたいのは、三層構造論はスーフィズムを説明するためのものであり、スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象を説明するためには、戦略上スーフィズムと分けた後二者についてもそれぞれモデルを作ったうえで、それらを組み合わせて論じることを想定しているということである。すなわち、この三層構造論のどこかに、タリーカや聖者信仰が位置づけられるわけではない。したがって、以下の記述においては、スーフィズムにしぼって説明することを旨とするが、論述の都合上、どうしてもタリーカや聖者信仰にふれざるを得ない部分が存在する。この部分については、いずれ研究を進めて書き改めるべき責務を負っている。［東長 2002c: 133］

本稿は、この責務を果たそうとする試みの現時点での到達点を示すものである。

第二は、図式化の危険性を指摘するものである。赤堀は、「スーフィズムが常にこれらを要素として内包するという誤解を招く可能性はある」と警鐘を鳴らし、鎌田は「個々のスーフィズムを論じる際にこの論を持ち出すと、余計な枠組を追加してしまうことになりはしないか、との危惧もおぼえる」と述べ、森下は、「本論があまりに理路整然と一貫し、ディスクリプティブな要素に欠けている点に、筆者はどうしても違和感が否めない」と感想を述べる。

これについては、本論を提唱した最初から、次のように述べていることを確認しておきたい。

> もちろん、分析枠組を作るだけで対象がわかるわけではなく、上に挙げたような問題点[7]に敏感になったうえで、原典資料（もしくはフィールド）を読み解くという精緻な作業が一方で必要とされることは言うまでもない。精緻な読み込みと俯瞰的な分析枠組の併用が重要であり、この両者がお互いにフィードバックすることによって、理解が深まっていくと考えるべきであろう。［東長 2002a: 191; 2013: 47］

なお、「三極構造」と「スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象」について、同じ内容を言い換えたものだという誤解が、四つの書評のうち二つに見られたのは、筆者としては意外であった。「複合現象全体をスーフィズムとし、そのなかの3軸の名称は神秘主義・道徳・民間信仰に統一すると全体がすっきりするように思えた」［鎌田 2014: 102］、「著者の理解では、スーフィズムとはこの三つの要素を含んだ複合的な概念であり―しばしば「神秘主義・聖者信仰・タリーカ複合体」とも呼ばれる―、（以下略）」［鶴岡 2014: 198］という指摘は、私からすれば明らかな誤読に基づくものである。この点については、複合現象論を最初に唱えた赤堀[8]が的確に、

7） 本稿第2節で挙げた5つの問題点を指している。

8） 活字になったものとしては［赤堀 2005］が初出であるが、元々は平成14–15年度基盤研究（C）（一）「東アラブおよびトルコにおけるスーフィズム・聖者信仰複合の学際的研究」［JSPS 科研費 JP14510382］（研究代表者：後藤明）の計画調書のなかで赤堀が唱えた概念である。

「複合現象」論はスーフィズムをひとつの要素とする複数の事象の構造的関係を問題とし、「三極構造」論はスーフィズム研究の総体を捉えようとする観点からの提案であり、この 2 つが単純に重なり合うような受け取り方をしないよう気をつけなくてはならない。［赤堀 2014: 302］

と指摘している。もっとも、読み巧者の神秘主義研究者お二人がこのように読まれたということは、私の筆力不足が原因かと反省させられたことであった。

5. 三極構造論の見直しと四象限論の提唱

このような批判を受けて、その後何回か見直しを試みてきたが、それはほとんど活字になっていないので、ここで紹介しておきたい。

5-1. 新三極構造論

2017 年の「スーフィズムの三極構造再考」と題する口頭発表では、上記の批判の内、民間信仰概念の曖昧さを改良しようとして、X 軸・Y 軸はそのままに、Z 軸を「民衆教導」とする「新三極構造」を提唱した［東長 2017］[9]。これは、Z 軸の部分でタリーカ・聖者信仰に言及せず、あくまでスーフィズムの枠内で民間信仰概念をどう説明できるかを試みたものである。

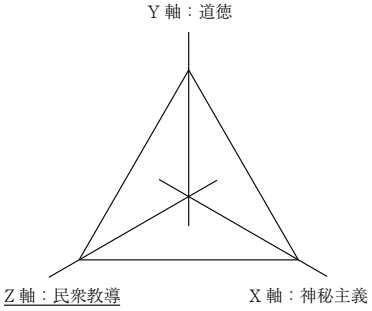


図 3 スーフィズムの新三極構造

この図式では、スーフィーが民衆との関わりのなかで持つ役割を下記の 3 にまとめ、それを「民衆教導」的側面と呼んだものである。

1）民衆教化的側面：説教師・シャイフとしてのスーフィー[10]

2）奇蹟的側面：聖者（ワリー）としてのスーフィー（現世利益を齎す存在としてのスーフィー）

3）魔術・呪術的側面：魔術師・呪術師としてのスーフィー

もちろん、すべてのスーフィーがこれらの側面を兼ね備えていたわけではない。ただ、中期以降については、完全に書斎のなかで思索と著述のみに没頭したごく一部のスーフィー思想家を除けば、多くがこのいずれかの側面（場合によっては複数の側面）をもっていたであろう。

9）ちなみに、X-Y-Z 軸の位置が以前と変わっているが、以前の位置づけは数学的に誤っていたので訂正したものである。

10）ここで、シャイフという呼称自体にタリーカが組み込まれているという批判が出るかもしれない。しかし、スーフィーが時に（というより中期以降においてはしばしば）タリーカのシャイフを兼ねていたことは事実であり、スーフィーの役割の一つとしてシャイフを挙げることは当然である。ただし、アプリオリに、スーフィーはシャイフであり、タリーカと関わっていた、としてきた旧来の説に対して、そうでない事例も多々あることを私たちは示してきた。したがってここでは、あくまでスーフィーを主体としつつ、その役割の一部として、シャイフを挙げている。ちなみに、説教師としてのスーフィーは、基本的にはタリーカと直接に結びつくわけではない。

5-2. 四象限論

三極構造論の精緻化とは別に、現代のとくに欧米におけるスーフィズムの動向への関心から、2017 年の国際会議では、現代スーフィズムの四象限論（英語発表時の表現は Four-Quadrant Theory）を提案した［Tonaga 2017］。下図に見るように、シャリーア志向性／ハキーカ志向性という対立軸と、イスラーム的スーフィズム／普遍的スーフィズムという対立軸の二つを用いた図式で、シャリーア志向性はほぼ三極構造論の道徳、ハキーカ志向性は神秘主義に相当する。この図式のなかの、第 1 象限の倫理的スーフィズムと第 4 象限の神秘主義的スーフィズムは、道徳、神秘主義のそれぞれを中心としたスーフィズムで、これら二つは、伝統的にイスラーム世界内部に存在していたものである。この図式の主眼は、これらに加えて、第 2 象限の伝統主義（もしくは永遠哲学）と第 3 象限の普遍的スーフィズムを新たに設定したことにある。両者ともに、スーフィズムが人類に共通の普遍的真理を追究するものと考えるが、シャリーアに対する姿勢が大きく異なっている。ルネ・ゲノンやフリッチョフ・シュオンらが主張した前者は、普遍的真理の追究と同時に、既存の宗教（この場合はイスラーム）の教義や儀礼、シャリーアの遵守を強調するのに対し、イナーヤト・ハーン、イドリース・シャー、バワ・ムハイヤッディーンらによって担われた後者は、普遍的真理さえあれば、シャリーアやイスラームに拘泥することはないという立場を取る[11)]。後者の主張は、20 世紀後半のニューエイジ運動のなかで大いにもてはやされ、現在のアメリカ・ヨーロッパのスーフィズム・タリーカ運動にも大きな影響を与えている。

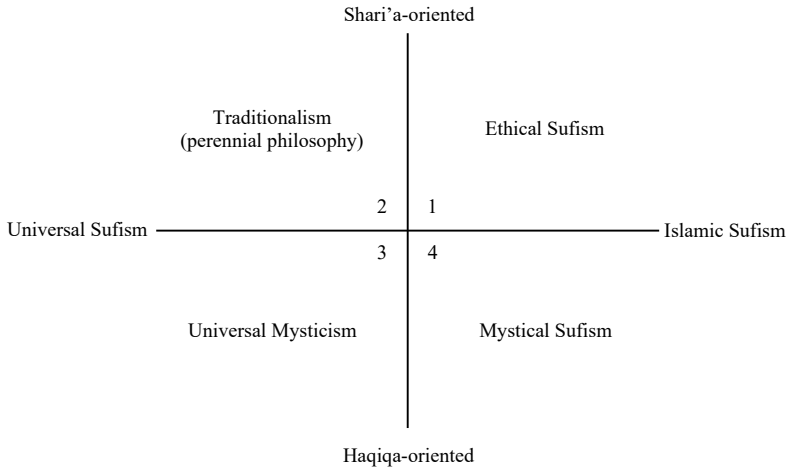


図 4 The Classification of Contemporary Sufism

この四象限論をスーフィズム全般に応用できないかと考案したのが、下図のような別の四象限論である［Tonaga 2020］。この新四象限論の特徴は、道徳（ここでは倫理という語を用いている）と神秘主義を一つの軸の両端に置くとともに、これまで道徳・神秘主義と並ぶ極とされてきた民間信仰的概念を、民衆対エリートという対立項として設定し直したことである。これら二つの対立軸によって、道徳的かつ民衆的、神秘主義的かつ民衆的、道徳的かつエリート的、神秘主義的かつエリート的、という四つのタイプを一つの図として表すことを目指したものである。

11）伝統主義、普遍的スーフィズムについてくわしくは、［東長 2013: 104–105］参照。

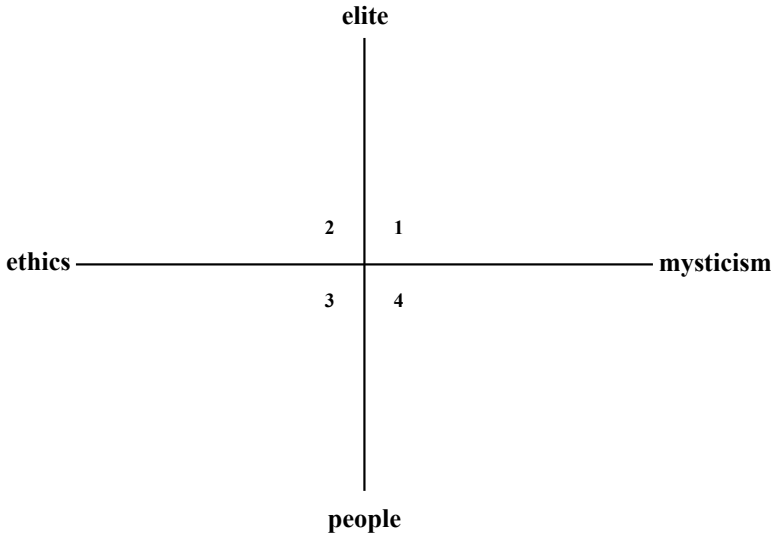


図 5 スーフィズムの新四象限論

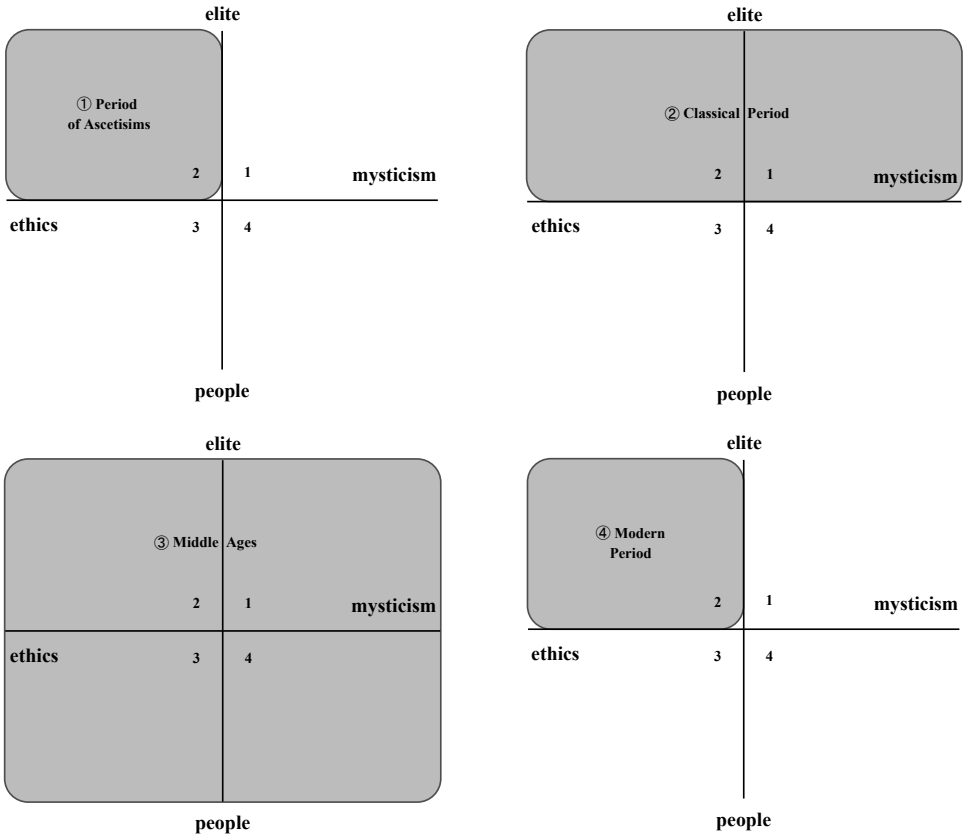


図 6 四象限論を用いた時代別の概念図

5-3. スーフィズムの三次元説

上記の二つの四象限論に、三つ目の対立項を取り込んで考案したのが、スーフィズムの「3 次元説」であった［東長 2021］。これは、現代スーフィズムの四象限論にあった「シャリーア志向性―ハキーカ志向性」、「イスラーム性―普遍性」（呼称は、すべてを「～性」で統一するために改めた）に、第二の四象限論にあった「民衆性―エリート性」（これも「性」の字を加えている）を加えた三つの軸からなる立体構造である。

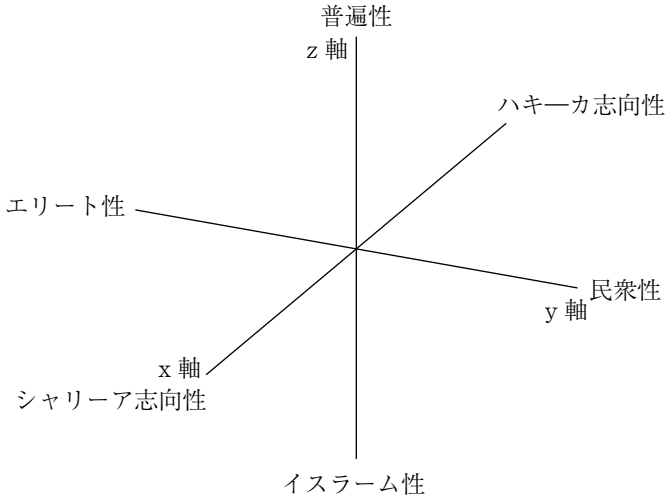


図 7 スーフィズムの三次元説の概念図

それぞれの軸について、［東長 2021］に基づいて簡単な説明をしておけば、以下のとおりである。

X 軸におけるシャリーアは文字通りには「イスラーム法」を意味し、外面的な儀礼や戒律の側面を指す。ハキーカはこれに対して、「真理」を意味し、内面的な精神性の側面を表す。シャリーアを志向するスーフィーたちにとってはシャリーアこそが最も重要なものであるのに対し、ハキーカを志向するスーフィーたちにとっては、シャリーアは彼らの霊的な旅路の出発点であるに過ぎないか、もしくはまったく重要性をもたず、むしろ善悪二元論として超克されるべきものである。現代スーフィズムの四象限論においては、道徳と神秘主義を二つの極としたが、前者がここでいうシャリーア志向性、後者がハキーカ志向性とほぼ合致している。

Y 軸は知の多寡を問題にしている。エリートは知的選良を意味し、他方民衆は、ここでは知の少ない者を指す。三極構造論では「民間信仰」という極を考えていたが、この概念は、外延があいまいであり、なおかつ、スーフィズムと密接に関わりながらも、別のものと考えるべきタリーカや聖者信仰を内包するような誤解を与えるため、ここではエリート対民衆という図式に改めている。

Z 軸におけるスーフィズムの「イスラーム性」という用語は、奇妙に思われるかもしれない。スーフィズムは元々イスラームに属するものだからである。しかしながら、上述した「普遍的スーフィズム」の主唱者たちは、スーフィズムはただ単にイスラームにのみ属するのでなく、それは人類全体の知的遺産であると考える。この側面を表す概念が、普遍性を強調する「普遍的スーフィズム」である。これに対して、スーフィズムはイスラームに非本質的なものでなく、あくまでイスラームに本来的に内在するものだという主張に基づいて Islamic Sufism, Quranic Sufism などという呼称

が実際に用いられてきている[12)]。これが、スーフィズムの「イスラーム性」を問題にすること（別言すれば「イスラーム的スーフィズム」という概念を用いること）の意味である。

「シャリーア志向性―ハキーカ志向性」と「イスラーム性―普遍性」という類似概念をなにゆえに別立てしたかの理由は、以下のように説明できる。前者は、イスラーム内部のみについても言えることで、イスラーム的でハキーカ志向型のものとしては、たとえばカランダルやマラーミー（マラーマティー）を挙げることができる。他方、後者の普遍性は、明らかにイスラームの枠を乗り越えようとするものを指している。このことは、現代スーフィズムの四象限論ですでに述べたとおりである。

この 3 次元説については、「スーフィズム研究と井筒俊彦」と題した［東長 2021］では、上記の概念図と、それを元に、井筒の理解するスーフィズム像を図示しただけであった。脱稿後に研究会で口頭発表する機会があった［東長 2020］ために、その機会に、この 3 次元説を、時代別のスーフィズム像に応用してみることにした[13)]。それが、以下の図である。なお、ここでは古典期のなかから、とくにスーフィズム成立以前とされるズフドの時代を別に設けている。

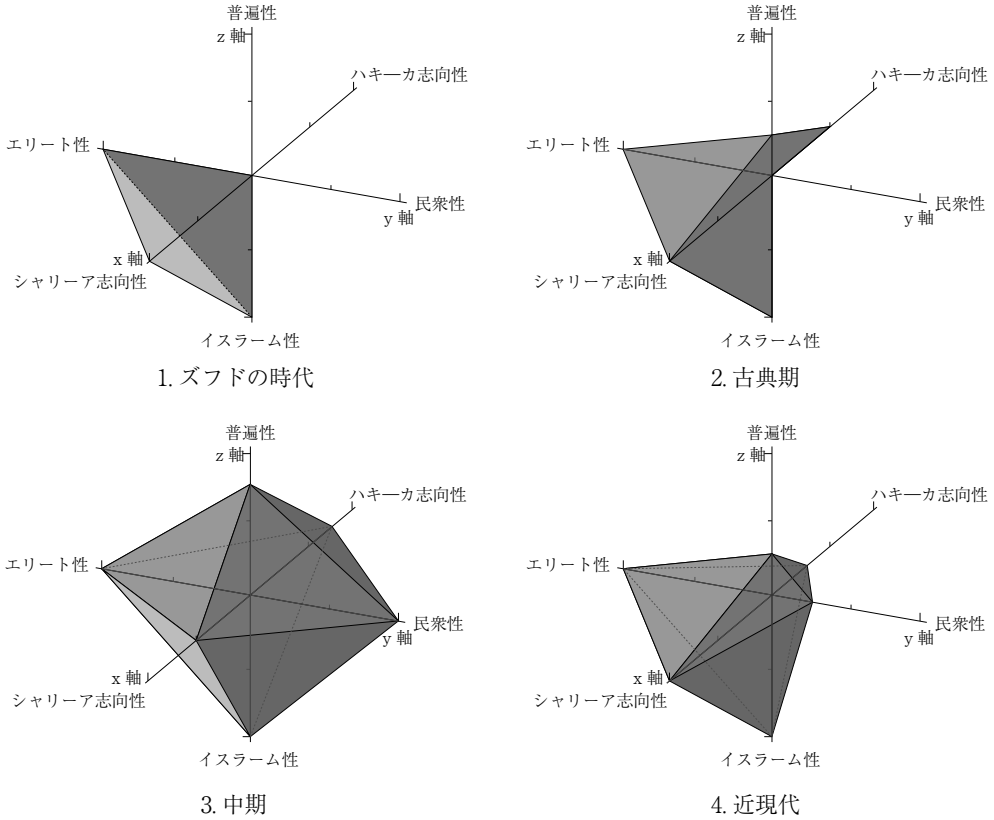


図 8 三次元説を用いた時代別の概念図

12）いずれも、実際に刊行された図書のタイトルに用いられたものである。たとえば、［Rozehnal 2007］、後者は［Valiud-din 1991］などに見られる。

13）この口頭発表に対してさまざまな批評をその場で頂戴したが、赤堀雅幸氏からは「次元という用語は、一つの次元に一つの名称を付けて、それのプラス・マイナスで示すもので、両端に別々の名前を付けるのはおかしい」という趣旨の指摘を受け、「三次元」というネーミングには問題があることを認識した。

5-4. 六角構造

上述の口頭発表の図（図 8）はかつての三極構造の図に比べて格段に分かりにくく、イメージが湧き辛いというのが、自分なりの反省点であった。この反省のうえに、三つの軸を立体交差させるのではなく、六角形を描くように平面に配置するということを考案した。これを、暫定的に「六角構造」と呼んでおく。これについては、これまでにどこでも発表したことはなく、本稿で初めて提示するものである。図示すれば、以下のようになる。

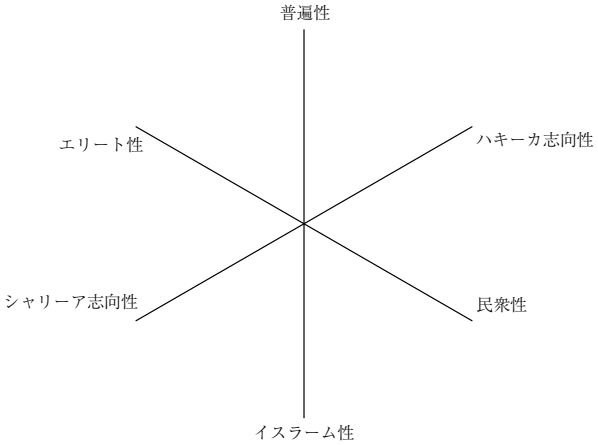


図 9 六角構造の概念図

これを元に、ズフドの時代から近現代までを図示するとすれば、次のようになるだろう。

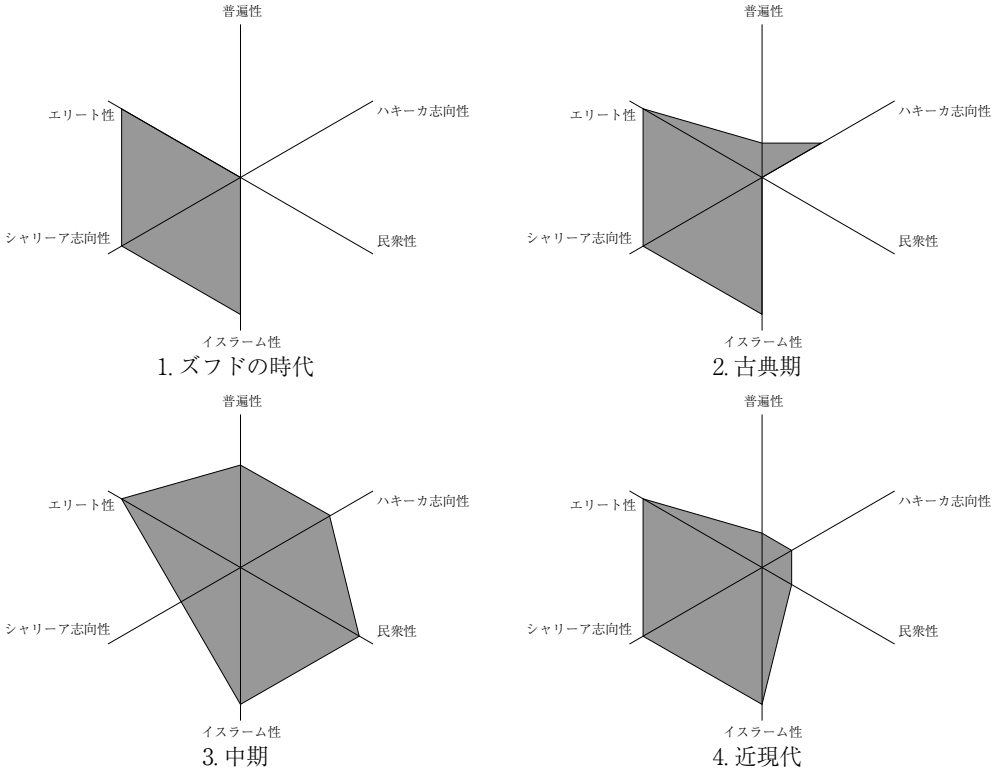


図 10 六角構造を用いた時代別の概念図

この図からは、ズフドの時代からスーフィズム成立後の時代（上では単純に古典期と表現している）にやや変化が生じ、中期に至って大きく変わり、近現代になるとまた古典期に近い形に戻ることが見て取れると思う。少なくとも、三次元説に比べると、視覚的には理解しやすいものになっているだろう。

5-5. もう一度四象限論

上述のように、二つの四象限論を元に、三つの対立項を設けて、六角構造に至った。しかしつらつら考えてみると、「シャリーア志向性―ハキーカ志向性」に加えて、「イスラーム性―普遍性」を加えたのは、あまりに現代スーフィズム（とくに欧米のそれ）を意識しすぎたからだとも思うようになった。とつおいつ考えてみると、シャリーア志向性とイスラーム性は、事実上ほぼ変わりがない。異なるのは、ハキーカ志向性はイスラームの枠内で収まっているとしたのに対し、普遍性は枠外まで広がっていくとした部分だけとも言える。そうだとすれば、ハキーカ志向性を極めたものが普遍性だという図式で描いた方が、より単純化できる。そこで、三度（みたび）、四象限論に戻ることになった。

対立軸としては、なるべく簡素で、なおかつ三極構造論をすでに知っている人に対して、余計な負担をかけないために、「道徳―神秘主義」と「民衆―エリート」のみを立てることにしたい。道徳は、一番最初から提唱しているように、スーフィズムそのものが深く関わっているadabの側面であるが、それをもっと突き詰めるとシャリーア遵守そのものの主張となる。たとえば、ハンバリー・スーフィズムの主張がそれであると考えられる。他方、神秘主義の側面は、イスラーム枠内のハキーカ志向性の側面であるが、それを究極まで突き詰めたところに、イスラームを超えた普遍性があると考えることにしたい[14]。民衆とエリートの対比は、すでに述べた通り、知の多寡の問題である。従来の四象限論は、原稿の形で発表したことが一度もないため、これをもって、改めて「四象限論」と呼ぶことにしたい。それを図式化すると、以下のとおりである。

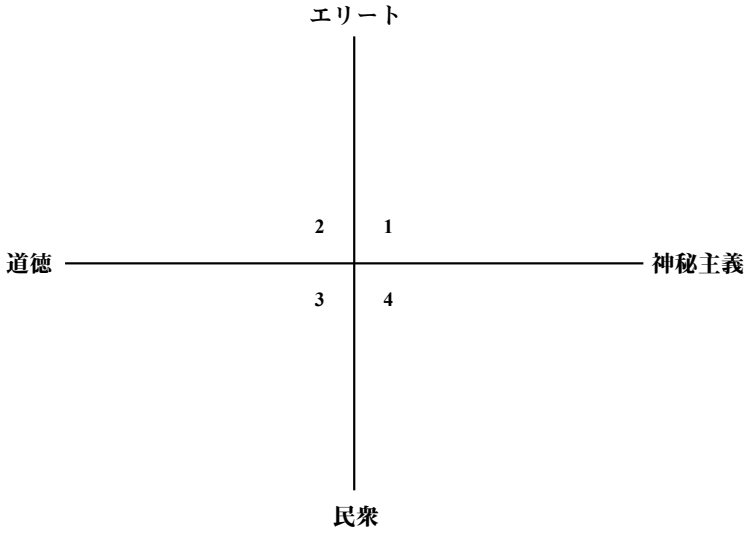


図11 スーフィズムの四象限論

14）「究極まで突き詰め」ることを、スーフィズムの最終目標だと考える立場も、イスラームからの逸脱だと考える立場もありうる。

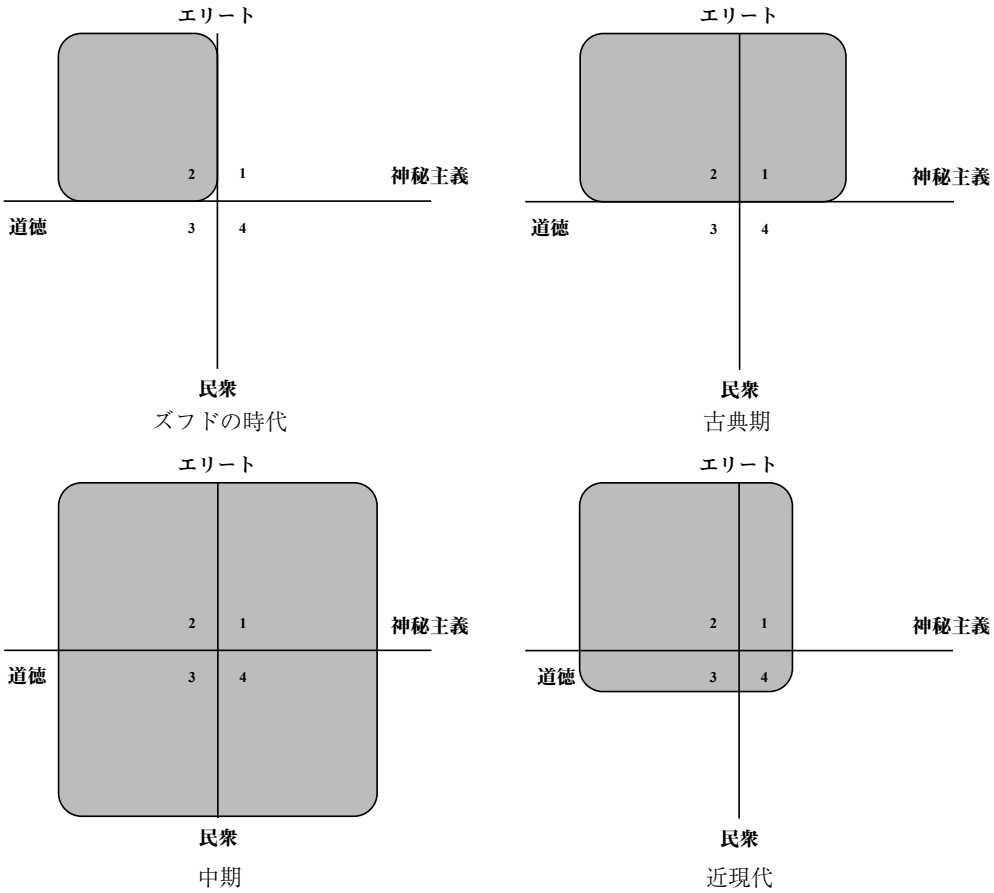


図 12 四象限論を用いた時代別の概念図

スーフィズムの定義を避け、構造化を試みた際に本来企図したことは、スーフィズム研究の文献学・思想研究独占からの解放と、倫理・道徳の側面の強調であった。前者をエリート対民衆、後者を神秘主義対道徳という対立項で示すことは、この本来の目的に最も適しているのではないかと思う。その意味で、本節で提起した四象限論を、現時点での筆者のスーフィズム理解の構図としたい。

6.「スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象」論の今後

本科研研究は、スーフィズム・タリーカ・聖者信仰それぞれの概念を定立したうえで、この三つが相互に関わり合う複合現象を追求しようというものであった。各概念の確立が想像していた以上に難しく、時間がかかったせいもあって、複合現象そのものの考察は、完全に成し遂げることができなかった。しかし、これについても、現時点の見通しを述べておきたい。

スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象とは、この三つが重なり合わない部分を持ちつつも相互に深く関係し、複合していることを指している。従来の理解は、スーフィズムという理論的なものを元とし、それが集団化・民衆化したものとして、タリーカ・聖者信仰をとらえるものであった。それぞれの研究が、スーフィズムは思想研究、タリーカと聖者信仰については、前近代（およ

び近代）は歴史学、（近）現代は人類学によって別個に担われてきたこともあって、その異同を検証することは行われてこなかった。

こういう現象に対して、私たちの研究グループは警鐘を鳴らし、作業仮説としていったんこの三者を解体して個別に検討し、そのうえでそれらを突き合わせて、新たな像を描こうと試みてきた。筆者が仮に概念図として描いたのが、次の図である。ある人物がこの三つの要素のそれぞれに関わっていたかどうかを示すのが最も分かりやすいと考えたので、以下のa〜gには、たとえばどういう人物が、それぞれの区分に属するかを示している。

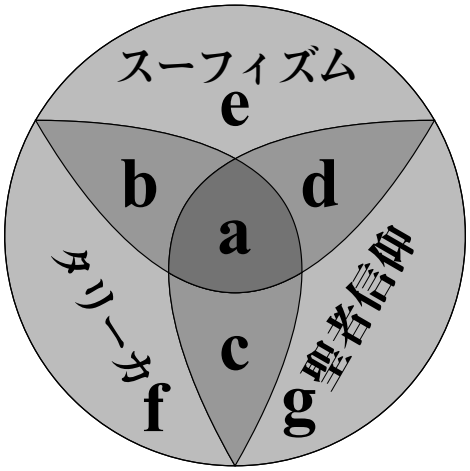


図13 スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象

これらの区分を順に説明していきたいが、以下、スーフィズム／タリーカ／聖者信仰の順に、○×を用いて表していく。たとえば、ある人物がスーフィズムともタリーカとも聖者信仰とも関わるa.の場合は○／○／○となる。

a.はスーフィズムに深くかかわり、タリーカに属し、なおかつ聖者信仰の対象でもあった事例で、たとえばイブン・アター・アッラー（1309年没）がこれに属す。彼は、著名なスーフィーであり、現在も信仰される聖者であり、なおかつシャーズィリー教団の第3代の師であった。b.（○／○／×）は、多数の修行者の占める領域である。彼らは、スーフィズムを学習し、タリーカのメンバーでもあった（もしくは現在そうである）が、無名で聖者として尊崇されてはいない。たとえば現代のタリーカでフィールドワークを行う際、スーフィズムを学んでいる若者で、シャイフの血縁者でないメンバーに聞き取りをすることがあるだろうが、そのような場合はここに属する[15]。c.（×／○／○）の代表例は、アブドゥルカーディル・ジーラーニー（1166年没）に求めたい。彼の著書は数多いが、スーフィズムと関係ないという強い意見があり、筆者もそのように考えている。他方、彼はカーディリー教団の名祖であり、現在も信仰される聖者である。d.（○／×／○）の代表例は、フジュウィーリー（1072年没）である。彼は、著名なスーフィーで、現在もダーター・ガンジュ・バフシュの名で信仰される聖者ではあるが、いかなるタリーカにも属さなかった。e.（○／×／×）には、クシャイリー（1072年没）など古典期スーフィーを同時代の文脈の中において分析する場合を挙げておきたい。彼は、スーフィズム古典マニュアルの執筆者として著名であるが、まだ形成

15）シャイフの血縁者である場合、聖者として現に尊崇されているか、いずれ尊崇されるようになる可能性が十分にある。もちろん、血縁が聖者性を必ず担保するわけではなく、ケースバイケースである。

されていないタリーカとはかかわりがなく、聖者として尊崇されてもいなかった[16]。f.（×／○／×）については、イブン・ハルドゥーン（1406 年没）の名を挙げておきたい。彼は、スーフィズムとは無関係であり、聖者として尊崇されてはいない。しかし、タリーカのもつ修道場の管理人であったことが知られている[17]。最後に、g.（×／×／○）にはたとえば、シャーフィイー法学派の祖であるイマーム・シャーフィイー（820 年没）や、赤堀［1995］が取り上げた聖者アウワーム（原著では「スィディ・アルアゥワーム」）の例を挙げておきたい。彼らは、スーフィズムと無関係（それどころか後者に関しては、おそらくイスラームとも無関係）であり、いかなるタリーカにも属さなかったが、聖者として信仰されている（きた）ことは疑いようのない事実である。

ところで、スーフィズムの「四象限」論を従来の「三極構造」論に代えて提案したのは、民衆的要素（三極構造論では「民間信仰」）の部分の曖昧さ、より具体的にはこの部分はスーフィズムそのものについて語っているのか、タリーカや聖者信仰について語っているのかが判然としないという反省に基づくものであった。このことを逆手にとって、スーフィズムの外延についての定義に関して、あえて戦略的に曖昧さを残したうえで、三極構造論を、スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象に適用できるかもしれない。作業の手順として、いったんこの三者を別々に概念化したうえで、それらを組み合わせて総体を描き出そうという意図のもと、これをスーフィズムの三極構造としてきたが、実際の現場では、これら三つが重なっていることも少なくない。このような事例の分析には、民間信仰というタリーカ・聖者信仰との接合点を残したこの図式を復号現象の説明に用いることが、より有用に働きうるかもしれないと考えている[18]。

概念を構造で語ったり、図式化したりすることのメリットは、それぞれの要素間の異同を明確に示し、研究者自身が一次資料（文献やフィールドデータ）に基づいて自己の研究対象について語る際、いったいどの部分を指して議論をしているのかを認識しうること、さらには、学際的研究を行う際にはとくに、お互いがどの部分を指して議論をしているかを常に意識することで、議論の齟齬を防ぎ、同じ俎上に乗れるようにすること、である。複合現象についても、異分野の研究者たちから批判を頂きながら、共に議論を続けていきたいと願っている。

謝辞

本稿は JSPS 科研費 JP16H01904 の研究成果の一部をなすものである。本稿の執筆に先立つ研究発表では、中西竜也氏（京都大学）、澤井真氏（天理大学）他に有益なご指摘をいただいた。記して感謝申し上げる。

16）ただし、彼が後代、聖者として尊崇されていた可能性は捨てきれない。したがって、通時代的にクシャイリーを分析するなら、d.（○／×／○）に入る可能性もある。f. の例として挙げる際に「同時代の文脈の中において分析する場合」と限定を加えた所以である。

17）彼は、カイロのバイバルス・ジャーシャンキール・ハーンカー（Khānqāh Baybars al-Jāshankīr）の長に任命されている［Talbi 1960: 827］。

18）三極構造論をスーフィズムでなく、複合現象に適用できるのではないかという指摘は、2021 年 1 月 21 日に開催された 2021 年度第 3 回研究会において赤堀雅幸氏および丸山大介氏から頂戴したものである。ご提言に感謝申し上げる。複合現象の図式化としては、現在の 3 要素よりももっと優先すべき要素があるかもしれない。これについては、さらに検討を続けていきたい。

参考文献

赤堀雅幸 1995「聖者が砂漠にやってくる――知識と恩寵と聖者の外来性について」『オリエント』38(2), pp. 103–120.

――― 2005「スーフィズム・聖者信仰複合への視線」赤堀雅幸・東長靖・堀川徹（編）『イスラームの神秘主義と聖者信仰』（イスラーム地域研究叢書第 7 巻）東京大学出版会, pp. 1–19.

――― 2014「書評:『イスラームとスーフィズム――神秘主義・聖者信仰・道徳』名古屋大学出版会」『アジア・アフリカ地域研究』13(2), pp. 300–304.

鎌田繁 2014「書評　東長靖著『イスラームとスーフィズム：神秘主義・聖者信仰・道徳』名古屋大学出版会」『オリエント』56(2), pp. 101–105.

鶴岡賀雄 2014「東長靖著、『イスラームとスーフィズム――神秘主義・聖者信仰・道徳』、名古屋大学出版会」『宗教研究』88(1), pp. 196–202.

東長靖 2002a「スーフィズムの分析枠組」『アジア・アフリカ地域研究』2, pp. 173–192.

――― 2002b「スーフィズムとは何か――その構造と位置づけをめぐって」『イスラームとは何か――「世界史」の視点から』（別冊『環』第 4 号）藤原書店, pp. 143–148.

――― 2002c「神秘主義イスラームの現在――スーフィズムの三層構造論をもとに」『思想』941, pp. 119–135.

――― 2005a「タサウウフ研究の最前線――思想研究の立場から」赤堀雅幸・東長靖・堀川徹（編）『イスラームの神秘主義と聖者信仰』（イスラーム地域研究叢書第 7 巻）東京大学出版会, pp. 95–114.

――― 2005b「第 2 回　イスラームの神秘主義と聖者信仰――イスラーム学の伝統のなかで」2004 年度第 3 期中東理解講座「スーフィー・聖者・精霊の世界――民衆のイスラーム」2005 年 1 月 19 日、於国際文化会館講堂（口頭発表）.

――― 2013『イスラームとスーフィズム――神秘主義・聖者信仰・道徳』名古屋大学出版会。

――― 2017「スーフィズムの三極構造再考」科学研究費・基盤研究（A）（一般）「イスラーム神秘主義の構造的理解――スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象の解明」研究会、2017 年 12 月 23 日、京都大学（口頭発表）.

――― 2020「スーフィズムの 3 次元説」科学研究費・基盤研究（A）（一般）「イスラーム神秘主義の構造的理解――スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象の解明」研究会、2020 年 12 月 20 日、オンライン（口頭発表）.

――― 2021「スーフィズム研究と井筒俊彦」『宗教哲学研究』38, pp. 15–24.

丸山大介 2013『現代スーダンにおけるスーフィズムとタリーカ――超越性・規範性・共同性』（京都大学提出博士論文）.

森下信子 2014「書評と紹介 東長靖著『イスラームとスーフィズム：神秘主義・聖者信仰・道徳』」『イスラム世界』81, pp. 90–94.

Chittick, William C. 2000. *Sufism: A Short Introduction*. Oxford and Boston: Oneworld Publications.

Ernst, Carl W. 1997. *The Shambhala Guide to Sufism*. Boston and London: Shambhala.

Maruyama, Daisuke. 2015. “Redefining Sufism in Its Social and Political Contexts : The Relationship between Sufis and Salafis in Contemporary Sudan,” *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies* 8, pp. 40–56.

Rozehnal, Robert. 2007. *Islamic Sufism Unbound: Politics and Piety in Twenty-First Century Pakistan*. New York: Palgrave Macmillan.

Talbi, M. 1960. s. v. “Ibn Khaldūn,” *EI*², vol. 3, pp. 828–828

Tonaga, Yasushi. 2017. “Potentiality of Sufism in the Contemporary Period,” 2017 KAMES International Conference, “Seeking Harmony and Prosperity for the Middle East in the Era of Uncertainty,” 22–24 September 2017 at Hankuk University of Foreign Studies and President Hotel, Seoul.（口頭発表）.

———. 2020. Keynote Speech “Wisdom of Coexistence according to Sufism,” Kyoto University-Syarif Hidayatullah State Islamic University Jakarta (UIN) Joint Seminar, “Wisdom of Coexistence in the Islamic Thought: Graduate Seminar on Sufism,” 17 February 2020 at Syarif Hidayatullah State Islamic University Jakarta.（口頭発表）.

Vali-ud-din, Mir. 1991. *The Quranic Sufism*. Lahore: Sh. Muhammad Ashraf.